

大寒も過ぎて陽の光も立春に向け和らいできた。今年の年回りは戊戌(つちのえ・いぬ)、勢いのある年回りといわれている。60年前は、当時の皇太子殿下と美智子さまがご婚約され、東京タワーが建ってテレビ時代となった。今年はそのような年となるのだろうか。対立や憎しみでなく愛の勢いが広がってほしい。書き初めにはそう思った思いを込め、「幸くませ真幸くませ」と人びとの声渡りゆく御幸の町に(皇后陛下御歌)を書かせていただいた。ちなみに7歳の孫は「ほほえみ」と書いて9代の両曾祖母に見せていた。

さて、現在の小学生が社会人となる頃には、人工知能などの発達で今の仕事の半分が無くな

人びりは輝く母性と家庭から

り、半数以上は100歳を超える長寿を生きたと予測されている。そのため、政府は「人生100年時代」「学び直し」「幼児教育無償化」など未来を見据えての政策を練り上げている。

人生100年となれば時代の変化に合わせるチャレンジ精神を持つとともに、普遍的な「愛とまごころ」を人格の中心に育てていくことが教育上より一層大切なこととなっていくだろう。

「愛とまごころ」などと言うと、少女趣味かと揶揄する向きもあるが、私がこの価値の凄みを知ったのはカトリック系の大学で修道女とともに教育を受けた時であった。厳しい環境の国々で命がけで献身し、「学び

参院議員 山谷えり子



〈やまたに・えりこ〉サンケイリビング新聞編集長、国務大臣(国家公安委員長・拉致問題担当相)など歴任。1男2女の母。

直し」のため一時的に戻って学ぶ年齢差のある修道女の「愛と忍耐」を目にし、私の人生を見る視点は変わったように思う。

当時は学生運動の激しい時代で、それまで公立の進学校にいた私は「女性には職場で差別される」「一人旅もできない」などと女性であることを不利なことと捉えるような会話の中にいたのだが、入学した大学では「女性であることの恵みに感謝!」

「お鍋はきれいに洗うこと。で

卒業して思うのだが、女性、母性を尊く思う感性和生活の知恵を共同体の中でいつの間にか育てられたことはありがたいことであった。かつて日本では妊娠5カ月の戌の日に神社に参り、安産を願う帯祝いをし、女性たちの共同体で赤ちゃんを授かりものとして育む心や、育児の知恵を伝えあったものであった。

最近の科学データでは6歳までに脳の9割以上が発達し、特に0から2歳児は親と一緒に安

■ 解答乱麻 ■

も困っている人がいたら鍋を放って助けに走りましょう」「苦勞の多いことを引き受けるのは喜び」などと言いつけていた。

マザー・ブリットという米国人女性が約20年間学長を務め、私の入学の少し前に亡くなられたが、「社会のどんな場所であってもあなた方は置かれた場所で灯を掲げる女性になりなさい」「学んだすべてを忘れても後に残ったものが教育の成果」「ものを頼むときは忙しい人に頼みなさい。暇そうな人には頼まない」「幾つものことを同時に手際良くこなすのよ」など遺された言葉のもと、学生や修道女たちはマザーの灯を消すまいと明朗によく働いていた。

らぎの中で情緒や知性、好奇心、思いやり、忍耐力の基礎が作られるという。主要先進国で幼児教育無償化の広がる根拠となったシカゴ大学のヘックマン先生の研究は、金銭ではなく、「愛情と子育ての力、良質な幼児教育が大切」と家庭と公教育の重要性を指摘している。

一昨年は「保育園落ちた、日本死ね」という悲しい言葉が流行語トップテンとなったが、人間本来のあり方としては、「働き方改革」とともに、母性尊重、母親を敬う社会づくりをしていかなければいけないと考える。「人生100年」の人づくりの基礎は、輝く母性と家庭にあるのだから。